コウノトリの野生　復帰と自然再生
試験放鳥を　9月にひかえて

黒いくちばしと赤い脚、そして赤いアイシャドウ、翼を広げたら２ｍという大きな鳥、コウノトリが今年の9月に豊岡でいよいよ試験放鳥されます。1971年に傷ついた野生個体が捕獲されて以降、34年(以上)という長い飼育の歴史を経ての復活です。そして、3年前に大陸から飛来し豊岡に居ついているオスの野生個体が野外でこの放鳥を見守っています。

コウノトリは、19世紀には日本の各地で繁殖していたらしく、江戸市中のいくつかの寺の屋根に巣をかけていたという記録が残っています。しかし、明治になって狩猟の禁制が解かれると、おそらくは銃猟によりその数を減らしたのだと考えられています。20世紀にはいると兵庫県の但馬地方でのみ生息するようになりました。1908年のコウノトリ禁猟、1921年の生息地天然記念物指定をへて、1930年ころには最大で100羽前後が但馬地方に生息していたと推定されています。

その後、第2次世界大戦をはさんで急速に減少し、1953年には天然記念物の種指定、さらに1956年には特別天然記念物への格上げがなされましたが、1959に豊岡で1羽のヒナがふ化したのを最後に、日本での自然繁殖は途絶えました。この絶滅に最後の手を貸したのが、農薬による水銀中毒でした。

コウノトリの顔

34年間の飼育の歴史は、必ずしも順調なものではありませんでした。捕獲した野生個体を飼育下で繁殖させる努力が続けられたのですが、この努力が実ったのは1989年のこと、ロシアから新たな血統を投入してのことでした。それ以降、飼育下での繁殖は順調に進み、現在では豊岡のコウノトリの郷公園には100羽以上のコウノトリが飼育されています。これらのなかから、もっとも適当な個体を選び、野生復帰に必要な訓練を施す一方、コウノトリの餌場となる河川や水田の自然再生事業、コウノトリを受け入れる地域社会の整備をおこなって今回の試験放鳥にいたったわけです。

しかし、その一方、自然が生易しいものでないことは昨年の台風23号が教えてくれました。円山川の堤防が決壊し、田んぼはもちろんのこと、豊岡市内のかなりの家屋が浸水被害を受けました。

「コウノトリはどんな鳥なのか」「どこに住んでいるのか」「何を食べているのか」「どんな声でなく？」「巣はどれくらい大きいの」「なぜ，豊岡にコウノトリが最後まで残っていたの」「最後のコウノトリに会えるかな」「コウノトリが空から見る豊岡盆地ってどんなの」「自然再生ってどういうこと」「どうやったらきびしい自然と折り合いをつけられるの」「受け入れる地域はどんな努力をしているの」、こんな数々の疑問に答えるために、ひとはくでは7月10日から9月24日まで、企画展「コウノトリの野生復帰と自然再生」を開催します。ご覧になられたら、コウノトリ博士になること請け合いです。

（自然・環境マネジメント研究部　江崎保男）

郷公園のコウノトリの親子

コウノトリの飛翔

写真は県立コウノトリの郷公園提供による